



DOCUMENT EYE

156

高速道路での後部座席のシートベルト着用者は442名中10名

高速道路での後部座席のシートベルト着用状況を観察する

車内上部のグリップにつかまる大人
シートベルト非着用の高齢者

帰省シーズン、 高速道路での後部座席の シートベルト着用状況は?

正月を故郷で迎える人たちの帰省ラッシュが12月28日から始まつた。前日に仕事納めをした企業が多く、帰省で高速道

路を利用し、故郷に帰る人も多い。帰省時の高速道路は、夜間運転や長距離の移動が重なって過労運転のドライバーも出るなど、「見えない危険」がかなり潜んでいる。

現在、幼児を乗車させる際にはチャイルドシートの使用が、また、運転者および助手席に同乗する際にはシートベルトの着用が法制化されているが、後部座席はこの規定がない。そのため、後部座席でのシートベルト着用例は極めて少ないようだ。

1月号で「一般道路を走るクルマの後部座席のシートベルト着用状況」を観察したのに引き続き、2月号では、帰省シーズンに家族連れて高速道路を利用するクルマの後部座席におけるシートベルト着用状況を観察した。

WATCHING

前席に身を乗り出して話す 子どもやシートを倒して寝る人も

観察は、東名高速道路・横浜町田インターチェンジで横浜方面から東名高速へ流入するクルマの後部座席でのシートベルトの着用状況を調べた。あわせてチャイルドシートの使用状況についても観察した。帰省や周辺の行楽地をめざしていると思われる家族連れのクルマが多く、子どもやお年寄りが後部座席に複数名乗車していることが多かった。

観察の結果、シートベルトの着用者は小学生とみえる子どもは105名中4名(3.8%)、大人にいたっては337名中44名中わずか6名(1.8%)、全体では442名中10名と、たった2.3%に過ぎなかつた。なかには、後部座席から身を乗り出しだて、前席の両親に話しかけの子どもや、長旅に備えてシートを倒し、毛布をかけ

シートベルトの重要性について 家庭で再認識する場を持つどう

今回の観察で、高速道路を利用するくるマの後部座席のシートベルト着用率が

て寝ている人もいた。後部座席に座る高齢者も多かったが、シートベルト着用者は見られず、車体の揺れを避けるために車内上部のグリップを握りながら座っている高齢者を多く見かけた。小学生でシートベルトを着用していた4名のうち、2名はシートベルトが首にかかっていた。チャイルドシートの使用状況についてだが、6歳未満と見られる幼児45名中28名(62.2%)がチャイルドシートを使用していた。未使用の場合には、母親や祖母が抱きかかえたり、膝の上に座らせている例が多く見かけられた。

PROPOSE

シートベルトの重要性について家庭で再認識する場を持つどう

ベルトの重要性について家庭で話しあつてほしい。

乗員が受けける衝撃および損害は甚大である。平成13年の高速道路における自動車同乗者のシートベルト非着用の死者数は77名で、着用者の死者数(19名)の約4倍となっている。また、シートベルト非着用者の車外放出による致死率は約5割とも言われている(平成13年版ビジュアルデータ 図で見る交通事故統計 (財)交通事故総合分析センター)。よ

く車に乗るとき、同乗者を乗せると、座席の位置がどこであっても「必ずシートベルトを着用する」とことを徹底すべきだ。まず、親が手本を示すことで子どもや高齢者にも啓発してシートベルト着用およびチャイルドシート使用を積極的に推し進めてほしい。家族での移動が多いこの時期に、ぜひもう一度シートベルトの重要性について家庭で話しあつてほしい。

